

町家とモダン家具の、軽妙なコントラスト



二条城からほど近い住宅街に佇む町家。間口の狭い、いわゆる「うなぎの寝床」と呼ばれるスタイル。白いのれんが清々しい。



サイクリングが趣味のダヴィッドさん。玄関のたたきの土間には、スイスやベルギー製の愛車がかけられている。

LIVE↑
your own way!

大きな窓から光がたっぷり差し込む、1階のワークスペース。「カリモク ニュースタンダード」の白木の家具が、軽やかな雰囲気醸す。

古い日本家屋を、粹に住みこみます。大がかりな改装をすることなく、モダンな感性でさらりとこれを実現しているのが、スイス出身のダヴィッド・グレットリさんだ。

「大阪から引っ越してきて、まだ4カ月なんです」

流暢な日本語で迎え入れてくれたのは、間口が狭く奥行きが深い、典型的な京都の町家。築100年という木造の建物や美しい坪庭の風情もさることながら、随所に配された家具や照明が、モダンな雰囲気と違和感なく溶け込ませている。

「町家の空間には合わないだろうって、事前にメーカーのスタッフには言われました。でも置いてみたら、すくく建物とマッチしたんです」

和の空間に馴染む、軽やかで小ぶりのデザイン

ダヴィッドさんは、家具メーカーのカリモクが5年前にスタートさせたブランド「カリモク ニュースタンダード」のクリエイティブ・ディレクターを今年から務めている。ここは、住居兼ショールームで、置いてある家具の多くが同ブランドのものだ。

最初は住居とショールームを別々にすることも考えたというが、時を重ねてきた味わい深い建物と、若手デザイナーの手がけた家具とのコントラストを見せたいという気持ちが決め手となった。

「日本では、デザインはカッコいいという意識が先行してしまっただけで、自分の生活とつながる感覚がなかなかもてないでしょう？ 言葉で説明するより、こうした場を見れば一目瞭然だと思っただけです」

こう語るダヴィッドさんは、町家の暮らしを心底エンジョイしている様子。床が板張りの部屋は玄関を入ってすぐ右横のひとっただけだが、ここにデスクを置いてワークスペースとしている。住宅街なので、車はめったに通らない。「ときおり窓越しに、表の道を歩いて行く近所のおばあちゃんや、郵便配達のおばあちゃんが見えるくらい。すごく静かで、のんびりした環境です」

気分転換したい時は、奥の二間続きの座敷へ。襖を取り払っているのが、最奥の坪庭まで望めて実に気持ちいい。北欧のラグやイサム・ノグチの照明が、モダンな彩りを加えている。そして、意外にもちゃぶ台のように落ち着いた雰囲気醸しているのが、14角形の天板をもつカリモク ニュースタンダードのテーブル。「ここで寝転がったり、風を感じながら縁側に座ったりしていると、リラックスできるんです」

ホームパーティーの際は、ゲストをもてなすスペースに「転するなど、フレキシブルに使えるのも和室の醍醐味。パスタやラザニアなど、イタリアンがダヴィッドさんの得意料理だ。玄関か





1階奥の座敷で坪庭を眺めていると、時間が経つのもあっという間。この家は保存状態がとてもよく、建具や柱も味わい深いものばかりだ。



アトリエとして使えませの小部屋。窓があるので採光は感じない。手すりの裏には小さな交差点が写っており、火災の警報を連発させている。



器やツールがたぐとみ並び、料理を楽しむさまざまな機能が揃ったキッチン。イスから送られたハチミツも、作り付けの水屋扉は、収納力たっぷり。



階段を上ったところには飾られた、アーティスト、植田志保さんの絵画。フレーミングせず、さりげなくかけているのがダヴィッドさんらしい。



右端の写真の反対側にあたる、2階リビングの和室。半間の床の間に置かれた、岩のようなコンクリートの塊は、松屋建築さんのアート作品。



寝室の横にある扉を開けると、秘密の小部屋が登場。襖や障子を開放してオープンに使える。この家の中で、唯一こもれる空間だ。



リビングやゲストルームとして使っている、2階の和室。押入れが板の間で改装されていたので、ソファやシェルフを置いても広々としている。

ら座敷の横まで伸びている「通り庭」と呼ばれる土間が、細長いキッチンになっている。ダヴィッドさんが引っ越してきた時、すでに土間の床は板張りに改装されていたというが、かまどの跡や大きな水屋扉が昔を偲ばせ、新旧入り交じる趣深い空間だ。

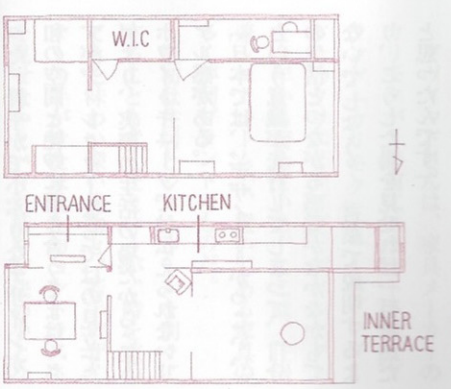
急な階段を上って2階に行くと、ワークスペースの上にある表側の部屋がリビング。ダイベッドにもなる固めのソファや格子状のAVボードなど、直線的なデザインが和室に自然と馴染んでいる。そうかと思えば、床の間には石の塊のようなアート作品が鎮座するなど、ちょっとしたハズシが心憎い。

2階の奥の部屋は寝室として使われているが、横に謎のドアを発見。開けると、わずかに畳ほどの極小空間が現れた。机と椅子だけでいっぱいはいない感じだが、ここをアトリエにして彫刻作品を造りたいと語る、ダヴィッドさんの目は少年のよう。秘密基地なる場合は、国籍を問わず、やはり男のロマンのようだ。

ちなみにここは、町家特有の「火袋」と呼ばれる台所の吹き抜け部分を塞ぎ、2階の床面積を増やしたことでできた空間。この増床によって納戸も生まれ、ダヴィッドさんはウォークインクローゼットとして利用している。

加えて、押入や天袋など、何かと収納スペースが多いこの家。家具をちりばめてもすっきり見えるのは、こうした見えない収納力によるところが大きいのだろう。

「そうですね、空間がすくよくよくできているなと思います。日本の家は建物というより、大きい家具のような感じ。空間の分け方も、レイヤーになってい



て面白い。襖を開け放つと、奥まで見通せすからね」

1階のワークスペースに戻って奥を見ると、確かに坪庭までが見通せて、小さな家にぐんと広がりを感じられた。夕方近くになって太陽が傾き、坪庭から西日が入ってきたためか、置いてある家具たちも、さつきより陰影がくっきりして、フォルムの美しさが際立って見える。1日の光の移り変わりで室内の表情が変わるのも、縦長の町家ならではの味わい深さだ。

町家暮らしをナチュラルに堪能しているダヴィッドさん。京都の夏の暑さには参ったというが、冬の寒さは大丈夫だろうか。

「ちょっと心配ですね。でも、暮らしながら新しいアイデアが湧くこともあるんです。そのうち、カリモクニュースタンダードからこたつが登場するかもしれませんよ(笑)」

DATA

- 家族構成 / 1人
- 竣工年 / 1910年
- 延床面積 / 95㎡
- 敷地面積 / 110㎡